

9. 建築物

9-2. 家の建て方

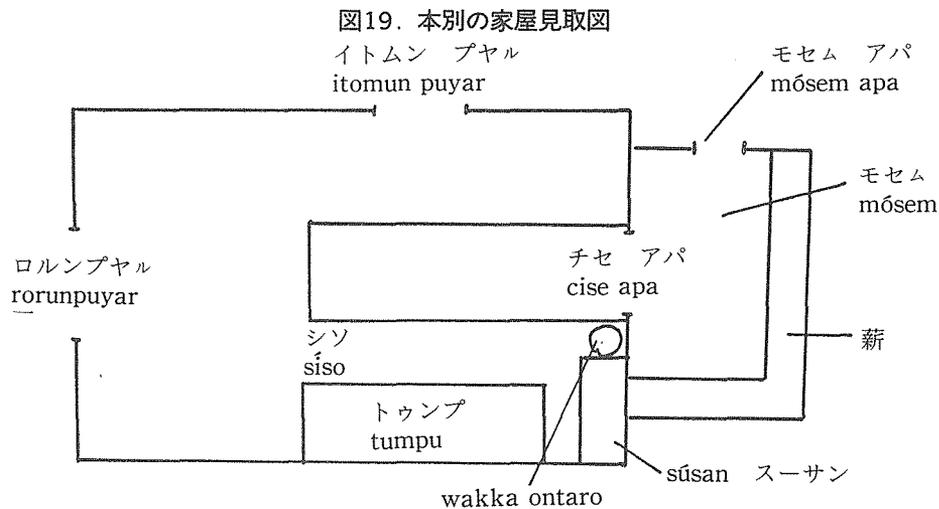
家はヨシ (サルキ sarki) で葺く。

居間は板床でその上にキナ kinaを敷いた。キナはポプケ キナ popke kinaという幅の厚い草で編んだものを使った。ヤヤン キナ yayan kinaで編むこともあるが弱くてすぐにボロボロになる。キナは夏に刈って、翌春に編む (イテセ itese) (3-2-1 参照)。

9-3. 家屋の内部構造

9-3-1. 屋内の配置

家の入り口には物置のモセム mōsemがある。モセムには背負って来た (ニシケ niske) 薪がいっぱい置いてある。長い薪はモセムに置けないので家の前の庭に互いによりかけて丸くして縛り、立てて (ロシキ rosiki) 置いておく (「長いのを選んで立てなさい。」ポンノ タンネワ オカイ ニ アムケ ワ ロシキ ヤン ponno tanne wa okay ni amke wa rosiki yan)。



戸口は外からモセムへ入るためのモセム アパ mōsem apaとモセムから屋内への入り口 (チセ アパ cise apa) がある。戸口はともに幅三尺くらいである。ススキ (キムン kīmun) で編んだアパオロツペ apaorotpeのアプッキ aputkiがかけてある。

窓は神窓 (ロルン プヤラ rorunpuyar) とイトムン プヤラ itomunpuyarと空窓 (エトゥポク etupok) の三つしかなかった。ヨシ (サルキ sarki) で編んだアプッキがかけてある。イトムン プヤラは左座にある窓 (オハリキソ ウン プヤラ oharkiso un puyar) のことだ。

神窓から見て右側をシーソ siso (右座) といい、大きな家では、右座の後方に大人が寝るトゥンプ tumpuという部屋を作った。トゥンプには草 (ムン mun) が敷いてあって、その上に

アブッキ、さらにキナが敷いてあった(ムン カシケ ペカ ソ ア カラ mun kasike peka so a kar)。床が板敷きになった後も以前のように草を敷いただけだったので、床面から一段低くなっており、飛び降りて入った記憶がある。トゥンプの中には(トゥンプ オシケ ペカ tumpu oske peka) エカシ、フチの衣類と、よそ行きの衣類を入れてあるケトゥシ ketusを置いておく。

奥さんは、シーソの下手に座り、後方に高さ50cmくらいのスーサン s^usanと呼ぶ棚を作る。この棚の上に鍋を置いておく。流しはなかった。この棚の下に丸太をのこで上下を切っただけの高さ4、50cmくらいのイタタニ itatani (まな板)を置いた。イタタニは大小二種類あり、何でもこの上で調理する。大きなイタタニはチタタプ citatapを作る時などに使用する。小さなイタタニは炉ぶちでわずかのチタタプを作る時などを持ち運びする時に便利である。イタンキ itankiなどの食器は洗ってヨシで編んだ籠(ルサ シントコ rusa sintoko)に入れスーサンの上の梁からつるしておく。

また、スーサンのそばに置き水用の樽(ワッカ オンタロ wakka ontaro)が置いてある。シサム sⁱsamのものと同じであった。やがて代りに6斗のかめを使うようになった。冬はお湯を入れなければ凍るのでたいへんだった。昔は、がんび(樺皮)で作ったカクコム kakkom(図11参照)で水樽から水を汲んだ。その後、バケツで水を汲むようになった。

上座の右側(オシソウン osisoun)には宝壇(イヌマ inuma)があり、厚さ3寸、幅6、70cmの厚い板(イロンネ イタ ironne ita)が敷かれ、その上にシントコ sintokoが並び、シントコの上に酒鉢(パッチ patci)や酒を注ぐ(イオマレ iomare)時に使う片口(エトゥニブ etunip)が載せてある。そのイヌマの上の壁にはチセ イナウ cise inaw(家の守り神でタンネ カムィ tanne kamuyをかたどったイナウキケ inawkike)が刺してあった。

チセ イナウをその家のエカシ ekasの一代のイナウがすべて刺している。春秋のカムィノミ kamuynomiのたびに一本ずつ増えていく。即ち、一年に二本ずつ増えていく。エカシが亡くなった時、チセ イナウは、子孫に祖印(エカシイトクパ ekas itokpa)を残すために一本だけ(シネ イナウ sine inaw)残し、あとは葬る前にすべて「収める」(オブニカ opunika)(「祭壇に運び祭壇で送る」ヌサ オレン ア ルラ ヌサ オッタ アン オブニカ nusa oren a rura nusa otta an opunika)。

9-3-2. 炉とその周辺

炉の上に梁(イテメニ itemeni)からシナの木の皮のひも(クベルケブ kuperkep)でぶらさげられている火棚をパラカ parkaという。トゥナという言葉は知らない。

火棚の下手の方(オウサルン ousarun)には濡れた靴(ケル ker)、脚半(ホシ hos)、わらじ(ウシペ uspe)などを干す。上座の方(オロルン ororun)には肉(カム kam)や魚(チェブ cep)などを干す。肉を干す時、少し濡れた薪(ポンノ ティネ ニ ponno teyne ni)をくべると煙がでてはえを追い払う(モス オケウェパ mos okewepa)ので良い。

コルチはよく次のようにひとり言を言って、肉を火棚にあげていた。

「この肉はまだ乾いていない、まだ生だから、上座寄りの火棚にすこし置いたけれど、まだ生のような。この肉まだ生なので、乾いてないとはえがたかるからここに置こう。まもなく乾くよ。(オロルン パラカ ペカ ポンノ ア アレ コロカイ ナア フブ ネ チク アナクネ ナア タン カム フ クス ソモ サツ エアイカフ クス モス コトイセ ナンコロ クス タアン タ アナマ。イルカイ タン パラカ タ ア サツケ。 ororun parka peka ponno a are korkay, naa hup ne cik anakne naa tan kam hu kusu somo sat eaykap kusu mos kotoyse nankor kusu taan ta an ama. irukay tan parka ta a satke.)」

こうじを作る時にも火棚にあげておいた。

火棚の下には鍋かけ(スワツ suat)が下がっている。鍋かけは、三本あり、使わない鍋かけは上座寄りにずらしておく。大鍋をかける時、鍋かけを二本同時に使う。鍋の紐(ス アトゥフ su atuhu) を二本の鍋かけにかけて使う。

鍋かけの自在かぎの紐をスワツ アトゥフ suat atuhuというシナの木の皮(クケルケフ)をなつて(エハリキカ eharkika) 結び目(ウコウピテ ukoupite) を三つ作る。(図版16参照)

図20. 自在かぎの仕組み



〔本別 沢井トメノ氏〕

9-3-3. 火の神

神への祈り(カムイノミ kamuynomi)をするとき、炉に立っているアペウチ イナウ apeuci inawという大きなイナウ(オンネ イナウ onne inaw)の他にアペウチ ポン イナウ apeuci pon inawという小さなイナウを5本(アシクネ ポン イナウ asikne pon inaw) 立てる。その上に(カシケン kasiken)酒粕(シラリ sirari)を載せる。火の神(アペウチ フチ apeuci huci)は何といても「神に祈りを伝える 火の神(ソンコ コロ クン アペウチ フチ sonko kor kun apeuci huci)」だから、一から十まで責任がある。だから、シラリを捧げるのだ。酒をこした後のいい酒粕は杯(トゥキ tuki)にとっておいて(イヌムケセ ピリカ シラリ ウ

クワ アマヤナニ inumukese pirka sirari uk wa ama yan ani)、それを火の神に捧げる。エカシたちはカムイノミする時、火の神のイナウに酒粕を捧げる(エカシ ウタラ カムイノミ コロ アペウチ ポン イナウ シラリ コレ ekasi utar kamuynomi kor apeuci pon inaw sirari kore)。酒箸(イクパスイ ikupasuy)も人間が述べた事を火の神(アペウチ カムイ apeuci kamuy) やイナウに伝え、さらに、火の神やイナウが神々に伝える。

[本別 沢井トメノ氏]

9-4. 家屋の外部構造

家の北東方向に10間ほど離れたところに熊檻(セツ set)がある。あまり近すぎると熊の臭いがする(カムイ フラ ユプケ kamuy hura yupke)から離しておく。

嫁いだ先の沢井の家のヌサ nusa (ヌササンとは言わない)は家から60間ほど離れた所にあった。幅が10間もあった。ヌサの柳が根づいていかにも神様のいる雰囲気だった。ヌサが一番近くても神窓(ロルンプヤラ rorunpuyar)から20間離れていた。ヌサを他所に移す事をトゥクテ tukteという。ヌサはよそに移すものではないと言われていた。

食べ物を入れる倉をイペプ ipepuという。

[本別 沢井トメノ氏]

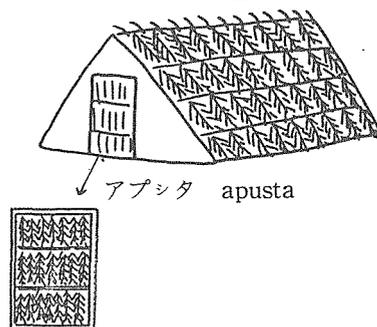
9-5. 猟小屋

猟小屋をカシコツ kaskotという。屋根は三角屋根でトド松(フブ hup)を逆さにして積みあげていき横木(サクマ sakma)でとめる。頂上は柔らかい松を曲げて、屋根が交わる所から雪が漏れないようにする。松を留める時に使う紐はぶどう蔓の皮(ハツプンカラ hatpunkar)、シナの木皮(クペルケブ kuperkep)、ニレの木皮(アソピウ asopiw)を用いる。

入り口に開き戸(アプシタ apusta)がついている。木杵にトド松の枝(フブタツ huptat)を編んでいく(テセ tese)。木杵は横棒を二本渡し、三段になっていて下の段からトド松の根を上にして編んでいく。最後になたで切って(タウケ tawke)そろえる。梢の方は編まないし、そろえなくてもよい。開き戸を上手に作ればどこに戸口があるかわからないほどである。

昔の男の人は十勝から阿寒などへもまたぎに行った。そんな時大きなカシコツを作り、トド松の枝を敷いて寝た。十勝から北見に行き、カシコツをつくったら、十勝の人も北見の人も使えるようにしておく。皆助けあったものだ。

図21. 猟小屋の概観



[本別 沢井トメノ氏]